

ニッポン

ドクター和の

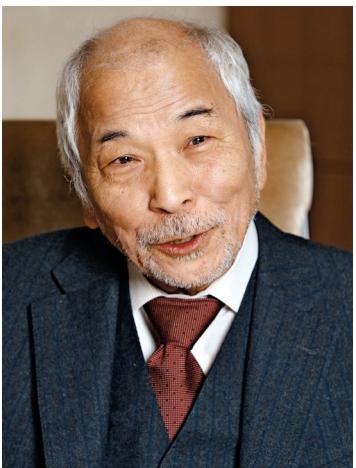
# 臨終回巻



長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。西国際大学客員教授。

「自殺」という言葉が嫌いであります。高校生の時、私の父がこの死に方を選んだことも影響しているのかもしれません。父は、その数年前より鬱病を患っていました。

「自殺」という言葉を目にすると、あの日の感情に引き戻される自分がいます。警察署で遺体を確認したのは高校生の私でした。自らを殺す？ では殺したのは誰なのか？ 殺されたのは？ 答えの出ない苦しみにもがいた青春時代でした。



亡くなる10日前、西部さんは新聞社の取材を受けていました。「数週間後、私は生きていません」と記者に明言し、取材後

が見えなくなったことを不審に思つた長男が捜索願を出していました。駆け付けた警察官に救

出されたときには意識がなく、搬送先の病院で死亡が確認されました。78歳でした。

『おのれの生の最期を他人に命令されたり弄り回されたくな

い』『自然死と呼ばれているものほとんどは、実は偽装』書を思わず買いました。そこには、こんな言葉が綴られています。

「自裁」には、精神的に追い詰められて仕方なく死を選んだというニュアンスがあります。

「自裁」には、精神的に追い詰められて仕方なく死を選んだというニュアンスがあります。

死の本ばかりを書いている私にとっても西部さんの言葉は衝撃でした。私は、自然に枯れて死んでいくことが平穀死であると説いています

が、総選挙があったので少しずらしたというのも、なんとも西

部さんらしいエピソードです。座右の銘は「狂氣に一抹の魅

力があることを認めぬわけではありません。人間が自然だと考えるに逝くとは何だ？ と考え直しました。人間が自然だと考えるに逝くとは何だ？ と考え直しました。人間が自然だと考えるに逝くとは何だ？ 人が関与してお

か。これが、川に身を投げる瞬間に見たものとは、この国の希望でしょうか、それとも絶望でしょう

が亡くなりました。1月21日午前7時前、東京都大田区の多摩川に飛び込みました。その日未明、自宅から姿

# 「生の最期」世に問う自裁死